

風姿花伝 六

花修かしょうにいわく云 其の四の二

また為手のなかには、上手な割には能を知らない為手もいれば、それほど上手でもないのに能というものを良く知っている為手もいる。貴い舞台や晴れ舞台などで、上手だけれども、間違つて能を演じてしまつたりするのは、能を知らないせいである。また、それほど**達者**ではなく、技もそれほどではない為手、つまり初心者ともいふべき為手が、紫宸殿などの前の**大庭**で演じても花がなかつたりするのは、為手としての上手さというより、本質的な意味で能を良く知っているからである。この両方の為手に関して言うならば、そうしてどんな大切な晴れの舞台であつても、常に良い能をするならば、その為手の名声は長続きするであろうし、上手ではあつても、その達者ぶりの程には能を知らない為手よりも、少し至らぬ為手であつても、能を良く知る為手の方が、一座を起こし率いる**棟梁**には向いているといえる。

能を良く知っている為手は、自分自身がやっていることで至らないことも知っているがゆえに、思うように出来ていない点を考へて、上手くできることがより表れるように能を仕立てることができるので、観客からいつも褒められ、**褒美**をいただけるような能を行うことができる。そうして未熟なところを、目立たぬように、またさほど重要ではないように常に見せることができるように練習すべきであり、そのようにして稽古に精進すれば、やがて自然に上手くできるようになる時分がやつて来る。そうするうちに能の大きく威厳のある能ができるようになり、余計なものも落ちて、そのうちに名声も得て、一座が**繁昌**するようにならば、その名声は定着し、老年になるまで花を残す為手になることができる。これは初心の頃から能を良く知るからであり、その心で苦心を重ねれば、**花の種**のようなものはおのずと見えなくなる。しかしながら、この二つの能のありようというものは、なんといいても人の心のありようから来るものであり、そこに勝負の分かれ目があると思ひ定めるべきである。

花修かしょう已上

ここで述べた諸々のことは、能を志す芸人でなければ、決して見てはならない。